

令和元年度(平成30年度実施事業分)事務事業評価各課総括表・2次評価表

2次評価者

水道部上水道課

水道部長 斉藤 清勝

整理No.	事務事業名	3か 年実 施計 画	事業の評価・課題		今後の事業の方向性	
			自己 評価	評価内容	方向性	内容
36-001	安定供給事業	あり	B	配水管のブロック化(区域の分割)では、乙川中部土地区画整理事業の進捗に合わせて実施する必要がある、同事業の進捗により令和2年度以降の実施予定となった。土地区画整理事業や分譲など新たな需要が見込まれる地域での配水管布設では、将来を見据えた管種、口径を選定して実施した。	改善 推進	配水管のブロック化については、乙川中部土地区画整理事業者と早期完了できるよう綿密に調整していく。高度経済成長時代に整備された施設や管路が更新時期を迎えていることから、ブロックをさらに細分化した管路網整理による改築更新計画や施設の適正な維持管理により延命化を図る計画等を令和2年度までに策定していく。
36-002	地震対策事業	あり	B	大口径配水管の改良工事については、砂谷配水池の高架化事業に併せた配水管の整備及び県補助金の交付を受けての老朽管の更新を行い、目標値を達成した。防災拠点施設等への応急給水栓整備については、計画の49か所全ての整備が完了できた。今後も被災時に断水区域・期間をできるだけ小さくするために、大口径配水管の耐震化を継続的に進める必要がある。	拡充 推進	大規模地震による被害が想定されており、被災時のライフライン確保は市民の関心も極めて高い。耐震管は、東日本大震災でもほとんど被害が発生しておらず、その耐震性能は高い評価を得ていることから、令和元年度、2年度の2か年で新たな耐震管などの整備・更新計画を策定し、計画的に布設替えを進めていく。
36-003	環境対策事業	あり	B	砂谷第3高架型配水池の運用を開始したことにより、吉田、深谷の増圧ポンプ場を停止し、残存する増圧ポンプ場の施設数を目標の3施設とした。一方で、新半田病院の移転に伴い、高区配水池から新病院への給水が現実のものとなった。基本計画には盛り込んでいなかった重要施設であり、限られた配水池の容量からも供給体制の確実な運用に努めていく。併せて配水のループ化や常滑市からの供給、もしくは深井戸の設置など、水源の二重化は不可避となる。	終了	なし
36-004	運営基盤強化事業	あり	A	お客様サービスの向上や経営基盤強化のため、窓口業務・検針・料金徴収等の包括的な民間委託を継続して実施し、毎月の催告や給水停止などの収納強化を図った。これにより、現年度末時点での収納率をさらに向上させることができた。	拡充 推進	給水収益は、長期的には人口の減少や節水型機器の普及により、減少すると予測されることから、継続して収納対策の強化や経費の縮減など効率的な運営に努めていく。今後は、経営戦略や新水道ビジョンを策定し、将来の展望を示すことにより水道事業の安定化を図っていく。また、口座割引制度の廃止についても、経営戦略に盛り込んでいく。
課等長	1次評価(30年度の総括評価)					
B	○近い将来発生が予想される巨大地震への備えとして実施している大口径配水管の改良工事については、砂谷配水池の高架化事業に併せた配水管の整備及び県補助金の交付を受けての老朽管の更新を行い、目標の耐震化率を達成した。防災拠点施設等への応急給水栓整備については、4か所設置したことにより、計画していた49か所全ての整備が完了し、被災時にもできる限り早く水道水を供給できるようになった。 ○増圧ポンプに頼らない自然流下配水区域の拡大を図る環境対策事業では、砂谷第3高架型配水池の運用を開始したことにより、吉田、深谷の増圧ポンプ場を停止し、残存する増圧ポンプ場の施設数を目標の3施設とした。これにより省エネルギーと維持管理費の縮減、停電時における断水の不安が解消された。なお、今後は増圧区域等の減少に努めていく。 ○運営基盤強化事業は、現年度末時点における水道料金収納率が年々向上してきており、目標値を上回ることができた。また、過年度の未収金も減少しており、収納対策を強化した結果が出ている。					
部等長	2次評価(30年度の総括評価並びに今後の方針及び指示事項)					
B	・最重要なライフラインを担う企業体として、多様な災害を見据えた訓練が不十分。平時において訓練していない応急措置が災害時に実践できるはずがない。職員の異動や時として経験年数の不足などから、応急復旧に係る対策の手順、市内配管工の確保など、対応が不安視されている。 ・一義的に経営収支の良し悪しが議論されるが、訓練の継続やBCPの改変等、平時だからこそ必要な取り組みが大きく不足している。 ・「経営者は危機管理の連続」。受水調整を始めとしたお客様への水送りはもとより、窓口の接客においてファーストコンタクトを決して間違わないなど、企業者としての自覚とプライドを以って経営に臨んで欲しい。					